

●大きな利益狙いが目的なら

今年上期の株式値上がり上位を振り返ると、ポストコロナで大きな成長が期待される銘柄の上昇が目立ちました。例えばテスラというソーラーパネルや蓄電池等を開発・製造・販売しているアメリカの自動車メーカーは、2003年設立以来、まだ一度も通年で黒字になったことがないにもかかわらず、昨年末418ドルから1793ドルまで急騰し、トヨタの時価総額を上回ったと注目されています。

最近では、「コロナ禍で大きく株価が下落したときこそチャンス」と投資のタイミングを計っている方が増えているようです。そこで、そんな方に参考になる2つの値動きパターンを紹介します。

ひとつは、今回の2月以降のコロナ相場のように世界同時に危機が走ると、通常なら破綻する怖れのない企業でも、まさに破綻を織り込む水準にまで株価が急落してしまうような動きがあること。ですが、このように「潰れるかも」と売られた企業は、「潰れないかも」とマーケットの見方が変わっただけで、その株価は大きく戻します。

例えば、2003年当時の都市銀行株。「銀行が破綻しても預金は守られるのか」と金融機関の破綻懸念が拡がる中、みずほフィナンシャルグループ（銘柄コード8411）の株価は大きく下落しましたが、その後3年かけ

て安値から10倍以上になりました。もうひとつは、世の中の生活を変えてしまう銘柄の値動きです。

2000年以降、固定電話から携帯電話、そしてスマホ時代に入って生活が一変しました。そして2020年以降は新型コロナの感染拡大で相場が暴落する前から、自動運転や5Gなどの紹介をきっかけに、スマホ時代から再びどんな変革期が訪れるのかと、株式市場では大型上昇相場の到来が期待されていました。

1990年代の終わりに固定電話から携帯電話への切り替えの流れに乗り、携帯電話ショップを全国に展開した光通信（9435）の株価は、1997年12月に2560円でしたが、その後急騰を繰り返し、2000年2月には24万1千円まで上昇して、その急騰ぶりが当時注目されました。

こうした、「どこまで買えるのかモノサシがない」銘柄の株価は、上がり出すと「糸が切れた凧」のように、買うから上がる、上がるから買うの循環で、風が吹く限り上がり続けるワクワク感があります。しかし、ブームが去った後の反動安も極めて大きなもので、天井をつけた後、光通信はたった8カ月後に元の株価に戻ってしまいました。

こうした銘柄に投資した多くの投資家は期待通りの成果を得ていません。途中では大きな利益が出ていたけれども、利益確定の決断がつかず、

結局、大きな値下がり損を抱える投資家が大半だったからです。

ポストコロナの需要を先取りして大きく上昇している銘柄の、さらに大きな上昇を信じて持ち続けるよりも、第一のパターンである「潰れるかも」という株価水準まで売り込まれた企業の中から、破綻の怖れのない銘柄を選別投資して、売られすぎた株価から妥当株価への戻りをじっと待つほうが投資を継続していくストレスは小さいでしょう。

●「潰れない」を重視した投資を

また、売られ過ぎた環境で個別銘柄を選別するのが難しい方は、実績のあるアクティブ型投信を活用して取り組むのも選択肢です。

図は、エネルギー関連事業からの輸送費・保管料・設備利用料などを収益の源泉とするMLP（マスター・リミテッド・パートナーシップ）のインデックスとアクティブ型投信の価格推移です。MLPは資源価格の低迷とコロナに伴う原油・ガスの需要喪失により、破綻を織り込む水準まで売り込まれた投資対象のひとつ。MLP企業の中で破綻リスクの高い企業を避け、需要が旺盛な天然ガス関連の銘柄群に選別投資を継続してきたMLPアクティブ型は、MLPの価格が3分の1にまで下がって配当利回りが20%程度まで上昇したことも手伝って、MLP全体を対象にするインデックスと比較して、良好な価格推移を示しています。

まだ破綻リスクがくすぶる水準にあるMLPがいずれ「潰れる→潰れないかも」と変化して価値を大きく戻すときが来ると確信する方であれば、一括投資ではなく、アクティブ型を活用して、機械的に「積立投資」感覚で底値圏での投資を継続しながら、大きく値上がりする局面をじっと待つ方法をお勧めします。

